

桜知らしめた詩的描写

文人の 武蔵野

中央区日本橋にあった岩村藩邸の屋敷内で生まれた佐藤一斎(1772~1859年)は、文化3年(1806年)2月28日、師である林述斎の勧めで、観桜のために徒歩で小金井橋を訪ねる一行に加わりました。

いざ小金井橋の桜を一望すると、噂に違わぬ絶景でした。述斎は、弟子たちに、どうしてここまできて黙っているのかと問いかけます。昌平坂学問所の大学頭である述斎が湯島聖堂から一行を率いてきたのは、鑑賞したその場で

佐藤一斎 ②



佐藤一斎自賛画像軸(岐阜県恵那市教育委員会提供)

互いに品評し合い、先生とともに詩を詠い唱和し合うためでした。

一同吟詠に夢中になるひとときがあり、やがて話柄は「墨東」との比較に移ります。小金井橋の桜ははたして隅田川の桜に匹敵し得るのか、述斎は一斎に向かって意見を求めます。今まさに師弟間で優劣

問答が始まらんとするとき、「忽ち」の大樹の前に竦立するに遇ふ。狂風の歟至して、飄片の撩乱して雨のどとく下れば、渾身は冷絶す」と、ドラマティックな場面が展開されます。前回の「文人の武蔵野」でも紹介したこの場面は、劣勢だった小金井桜が「墨東」の桜を超えた瞬間でした。その瞬間を詩的に捉えて江戸の文人たちに知らしめたのが「小金井橋観桜記」(漢文)でした。

承応2年(1653年)、水源が豊富でおいしい武蔵野の水を、江戸市中の人々にもたらしために玉川上水が築かれました。水辺には樹木が植栽されましたが桜樹はありませんでした。その後、元文2年(1737年)の頃に、徳川幕府の新田開発と桜事業の一環として小金井橋に桜が植栽されます。そのときの桜樹はやがて大きくなり見事な花

を咲かせますが、それを鑑賞していた人間はごく僅かでした。

「都の花は歌によみ田舎の花は陰に朽と」(古川古松軒)の「田舎の花」だった小金井桜は、時間をかけてその魅力を江戸に伝え、いわば官製の佐藤一斎「小金井橋観桜記」(1806年)において江戸の文人たちの認める「歌」となり、訪れる人の数も激増し、「小金井橋春景」(「江戸名所図会」1834年、1836年)において「名所」になりました。小金井に初めて桜が植えられてから、およそ100年後のことでした。(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。